

A-4

ノルウェー語で *komme* 「来る」はいつ使われるのか: ビデオ実験による分析*

谷川みずき 長屋尚典

東京大学大学院人文社会系研究科

mizuki.tanigawa.ling@gmail.com

要旨: 移動表現の枠付け類型論では、ノルウェー語は一貫して様態を主動詞で表し経路を主動詞以外の要素で表す付随要素枠付け言語であるとされてきた。しかし、先行研究は直示には十分に注目してこなかったため、ノルウェー語の移動表現の全体像を捉えきれていない。そこで本発表では直示動詞 *komme* ‘come’ の使用条件について国立国語研究所 MEDAL プロジェクトの B 実験の結果を用いて分析する。その結果、*komme* の使用には TOWARD THE SPEAKER という移動の方向だけでなく開放性や可視性など空間の特性も関わっていることを指摘する。このような特性は同じように話者の方向への移動を表す前置詞句 (*mot meg* ‘toward me’ や *til meg* ‘to me’) には見られず、直示動詞独自のものである。

1 はじめに

- 移動表現の枠付け類型論 (Talmy 1991, 2000) において、ノルウェー語は一貫して様態を主動詞で表し経路を主動詞以外の要素で表す付随要素枠付け言語であるとされてきた (Holum 2009; Johansen 2011; Dimitrova-Vulchanova et al. 2012; Egan & Gaedler 2015)

(1) Min venn løp ned trapper.

my friend ran down stairs

‘My friend ran down stairs.’

- しかし、これまでの先行研究は経路や様態のみに注目し直示には十分に注目してこなかったため、ノルウェー語の移動表現の全体像を捉えきれてるとは言いがたい
 - 直示 (deixis) とは話者の位置 (や言語によっては聞き手の位置) に敏感な表現 (Fillmore 1975)
 - * 「来る」: 移動時/発話時の話者の位置への移動
 - * 「行く」: 発話時に話者がいない位置への移動
 - 直示を言語話者がどのように表現するかは移動表現の類型論において重要である
 - * Talmy (1991, 2000) をはじめとする伝統的な移動表現の類型論においては、直示は経路 (path) の下位的な要素として捉えられていた
 - * しかし、近年では直示が移動の表示パターンに関して言語間および言語内の様々なバリエーションを引き起こす重要な要素として注目されている (松本 2017)
- 重要なことに、先行研究ではほとんど議論されていないが、ノルウェー語でも移動表現は直示についてバリエーションをみせる
 - ノルウェー語は「行く」に相当する動詞を持たず、「来る」に相当する動詞 *komme* のみを持つ
 - ノルウェー語には話者の方向への移動を表す表現パターンとして、様態を主動詞で表し直示を経路と同様に主動詞以外の要素で表すパターン (例 (2)) と直示動詞 *komme* を主動詞で用いるパ

* 本稿に関する内容については以下の方から貴重な意見および情報をいただいた: 鈴木唯、中川奈津子、林真衣、松本曜、諸隈夕子、吉田樹生 (敬称略)。言うまでもなく本稿に残るいかなる誤りも著者の責任である。なお、本研究は JSPS 科研費 JP19H01264 (代表: 松本曜) および JP22J23323 (代表: 谷川みずき) の助成を受けたものである。また、国立国語研究所共同研究プロジェクト「述語の意味と文法に関する実証的類型論」(代表: 松本曜) の成果である。

ターン (例 (3)) の主に 2 種類がある

- (2) のような付随要素付付け言語らしい表現パターンがあるにもかかわらず (3) のような直示動詞を用いるパターンが選ばれるのはどういふときだろうか?
- その条件の解明はノルウェー語および移動の種類論の研究において重要である

- (2) Min venn løp mot meg
my friend ran toward me
'My friend ran toward me.'
- (3) Min venn kom (løpende) mot meg.
my friend came running toward me
'My friend came (running) toward me.'

- そこで本発表では、ノルウェー語における直示動詞 *komme* 「来る」の使用条件を解明する
 - 具体的にはビデオ実験を用いて異なる条件下での *komme* の使用を計量的に分析する
 - 直示動詞 *komme* の機能について理解するために、直示前置詞句の *mot meg* 'toward me' や *til meg* 'to me' の同実験での使用と比較する
 - 動詞 *komme* の使用条件を明らかにすることにより、ノルウェー語の移動表現に新しい全体像を示し、その上でノルウェー語の移動表現の性質を類型論的に位置付ける
- 構成
 - 第 2 節: 本研究で用いた国立国語研究所 MEDAL 実験の B 実験を紹介する
 - 第 3 節: ノルウェー語の B 実験の結果を報告する
 - 第 4 節: *komme* の使用条件について議論する
 - 第 5 節: 結果をまとめる

2 方法

- 本研究では、国立国語研究所 MEDAL (Motion Event Descriptions across Language) プロジェクトで開発されたビデオ実験のうち、直示動詞の性質に焦点を当てる B 実験を用いた
- 異なる合計 54 本の刺激映像を被験者に視聴してもらい、その場にいるように想像しながら、映像刺激の内容を言語化してもらった。その中で今回分析対象とするのは以下の 4 つのポイントにおいて異なる 42 本の映像刺激である。
 - A 話者領域 1: 開かれた空間への移動 vs 閉ざされた空間へ/からの移動 (全 12 クリップ)
 - B 話者領域 2: 話者のいる階への移動 vs 話者のいない階への移動 vs 声かけ *hey* の有無 (全 12 クリップ)
 - C 可視性: 犬がケージに入る vs ケージから出る (全 6 クリップ)
 - D 話者向け行為の有無: 移動前後あるいは移動中に動作がある vs ない移動 (全 12 クリップ)
- 各移動シーンについて様態は WALK (ただし犬が移動主の場合は RUN) の 1 つである。直示情報においては各シーンについてそれぞれ異なる 3 つのクリップが用意されている。TOWARD THE SPEAKER (話者のいる位置へ近づく移動), AWAY FROM THE SPEAKER (話者のいる位置から遠ざかる移動), NEUTRAL (そのどちらでもなく話者の前を通過する移動) の 3 つの直示方向である。
- 実験は以下の要領で行った:
 - 実験キットはノルウェー語に訳したものをを用いた
 - 19 名 (20 代から 30 代の女性 10 名、男性 9 名) のノルウェー語母国語話者を対象に、ノルウェー

国内対面による実験と zoom を用いた遠隔実験を組み合わせた

- 方言差を考慮し実験参加者はオスロ周辺出身者に限った
- ELAN を用いて文字起こしをし、スプレッドシートでデータをアノテートした

3 結果

- 本節では *komme* に関する実験の結果を提示し (第 3.1 節)、その結果を統計的に分析する (第 3.2 節)
 - 特に、[A] 話者領域 1、[B] 話者領域 2、[C] 可視性、[D] 話者向け行為の有無の 4 つのポイントが、どの程度 *komme* の使用を引き起こしたかに注目する
 - *mot meg* ‘toward me’ などの直示前置詞句の使用の結果についても報告する (第 3.3 節)

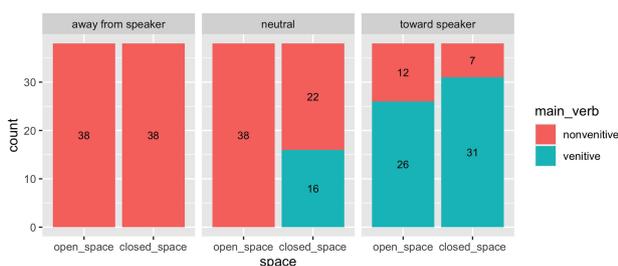


図 1 [A] 話者領域 1 (開かれた空間への移動 vs 閉ざされた空間へ/からの移動) における *komme* の使用

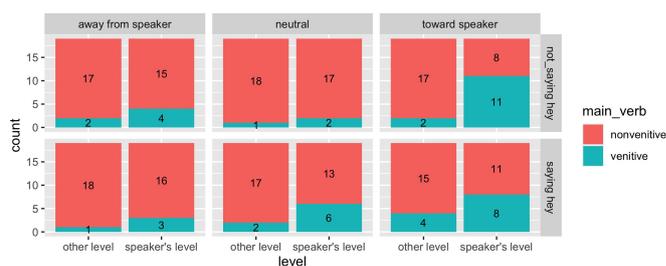


図 2 [B] 話者領域 2 (話者のいる階への移動 vs 話者のいない階への移動 vs hey の有無) における *komme* の使用

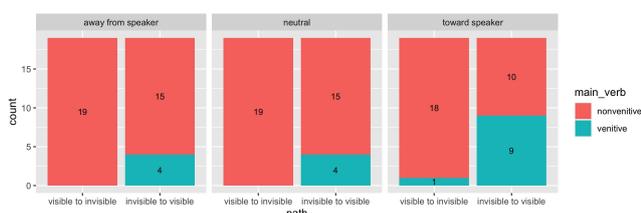


図 3 [C] 可視性 (犬がケージに入る vs ケージから出る) における *komme* の使用

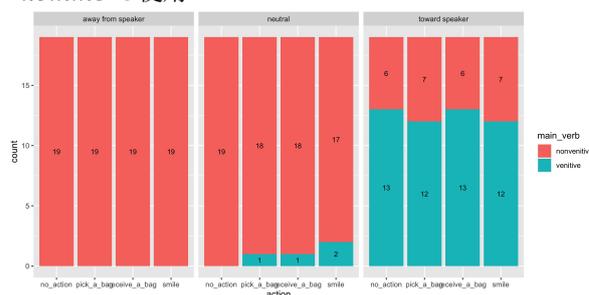


図 4 [D] 話者向け行為の有無 (移動前後あるいは移動中に動作がある vs ない移動) における *komme* の使用

3.1 *komme* の使用

- ビデオ実験における *komme* ‘come’ の使用は図 1 から図 4 のようにまとめられる
 - 図 1 から図 4 において ‘venitive’ とは *komme* を用いた回答のことであり、‘nonvenitive’ とはそれ以外の回答であり主に様態動詞 *gå* ‘walk’ を用いたものである
- A 話者領域 1: 開かれた空間への移動 vs 閉ざされた空間へ/からの移動 (図 1)
 - TOWARD THE SPEAKER シーンで多く使用された
 - 一方で、NEUTRAL シーンであっても閉ざされた空間のかかわる移動では使用される
- B 話者領域 2: 話者のいる階への移動 vs 話者のいない階への移動 vs 声かけの *hey* の有無 (図 2)
 - TOWARD THE SPEAKER シーンで多く使用された
 - 話者のいない階へ移動するときよりも話者のいる階へ移動するときの方が比較的多く使用された
 - 移動者が話者に向かって *hey* と言おうと言わまいが結果はあまり変わらなかった

- C 可視性: 犬がケージに入る vs ケージから出る (図 3)
 - どの方向への移動でも、可視的な空間から不可視的な空間への移動よりも、不可視的な空間から可視的な空間への移動の方が使われやすい
- D 話者向け行為の有無: 移動前後あるいは移動中に動作がある vs ない移動 (図 4)
 - TOWARD THE SPEAKER シーンで多く使用された
 - 移動に伴ってどういう行動を移動する人がとるかでは結果はほとんど変わらなかった

3.2 *komme* の使用に関する要因の混合効果ロジスティック回帰分析

- ここでは *komme* がどのようなときに使用されるかについて統計的に分析する
- それぞれのポイントについて *komme* の使用の有無を応答変数、クリップの直示の種類 (AWAY FROM THE SPEAKER/NEUTRAL/TOWARD THE SPEAKER)、各ポイントで重要なパラメタ (たとえばポイント A の場合なら閉じた空間が開かれた空間か) を説明変数とする混合ロジスティック回帰モデルをつくった
 - 個人によって *komme* の使用に違いがあると考えられるため、話者ごとに異なる切片を想定した
 - R の lme4 パッケージを使用した
 - ポイント A の式: `glmer(main_verb deixis + space + (1 | speaker_id), data = open_vs_closed_space, family = "binomial")`
- その結果を表 1 から表 4 に示した

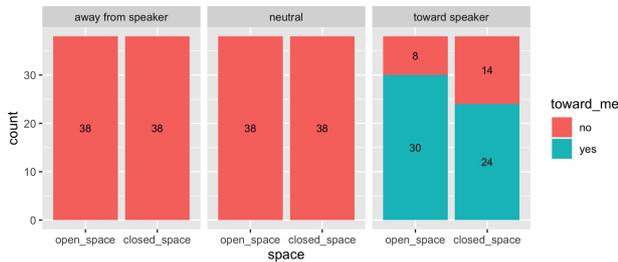


図 5 [A] 話者領域 1 (開かれた空間への移動 vs 閉ざされた空間へ/からの移動) での *mot meg* などの使用

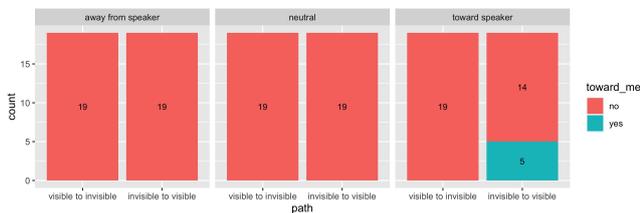


図 7 [C] 可視性 (犬がケージに入る vs ケージから出る) での *mot meg* などの使用

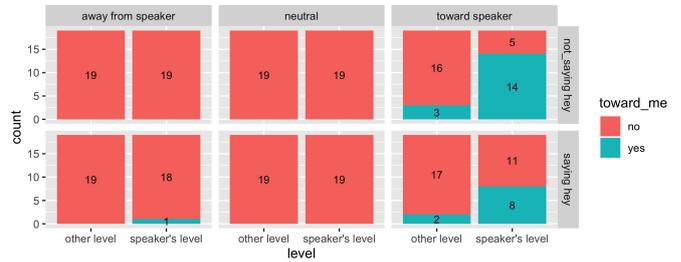


図 6 [B] 話者領域 2 (話者のいる階への移動 vs 話者のいない階への移動 vs *hey* の有無) での *mot meg* などの使用

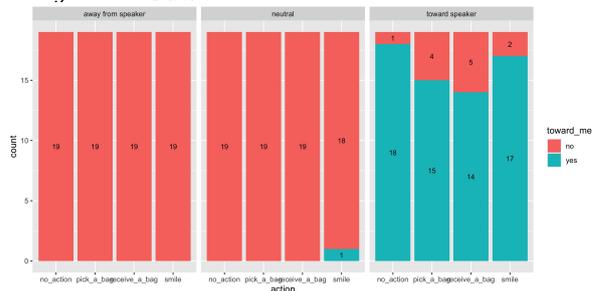


図 8 [D] 話者向け行為の有無 (移動前後あるいは移動中に動作がある vs ない移動) での *mot meg* などの使用

3.3 *mot meg* 'toward me' などの前置詞句の使用

- *mot meg* 'toward me' などの前置詞句はどのビデオのセットにおいても、TOWARD THE SPEAKER シーンで多く使用された (図 5 から図 7)

- それ以外の条件がかわっても *mot meg* などの前置詞句の使用はほぼ増えなかった

4 議論

- ノルウェー語の直示動詞 *komme* は以下の条件下で用いられる:
 - TOWARD THE SPEAKER を表すとき
 - 閉じられた空間からの移動を表すとき
 - 不可視的な空間から可視的な空間への移動を表すとき
 - 話者のいる階への移動を表すとき
- 本研究の発見がノルウェー語にとって意味すること:
 - 第一に、ノルウェー語の *komme* の使用には TOWARD THE SPEAKER という直示の方向だけでなく移動や空間の特性も関わっている
 - * 移動する空間の特性 (閉じた空間か、話者のいる階への移動か、見えるか見えないか) が関わっている
 - * これまでノルウェー語の辞書には *komme* は「話者の方への移動」に用いられる動詞であると記述されてきたが、それだけでは不十分であったことが本研究の実験結果により明らかになった
 - 第二に、ノルウェー語では同じ直示を表現していても直示前置詞句と直示動詞で性質が異なる
 - * 前置詞句の *mot meg* 'toward me' や *til meg* 'to me' は TOWARD THE SPEAKER という移動の方向のときに用いられる
 - * 同じ TOWARD THE SPEAKER の情報をエンコードしているが *komme* と *mot meg/til meg* ではどのような状況で使用されるかが異なる
 - 第三に、ノルウェー語の移動表現においてどういう条件下でバリエーションが見られるかが明らかになった
 - * 話者のいる階への移動、見えないところから見えるところへの移動で (2) のように直示を前置詞句等で表すパターンと (3) のように *komme* を用いて直示を動詞で表すパターンの間でゆれが見られることがわかった
 - 第四に、ノルウェー語の *komme* の特性は対立する *andative* 表現がなくても成立するものである
 - * ノルウェー語にはいわゆる *andative* 動詞 (英語の *go* や日本語の「行く」に相当する AWAY FROM THE SPEAKER という情報をエンコードする動詞) がない
 - * しかし、本研究で *venitive* 動詞 *komme* には上記で見たような興味深い機能的な特徴があるということがわかった
 - * このことは *komme* の特性が *andative* との対立によるものではなく、それ自体の特性であるということを示唆する
- 本研究の発見が移動の類型論にとって意味すること:
 - 第一に、*venitive* 動詞に機能的特性がみられるという通言語的な傾向がノルウェー語の *komme* でも認められた
 - * Matsumoto, Akita & Takahashi (2017), Matsumoto & Xia (2017): 直示動詞は、英語・日本語・タイ語・中国語において空間的な特性だけでなく、独自の機能的特性も持つ

- * 本研究では、ノルウェー語の直示動詞 *komme* にも同様な機能的特性があることを示した
- 第二に、venitive 動詞に機能的特性が見られることは同じであるが、どのようなポイントが直示動詞の使用を予測するかは言語によって異なる
 - * 例えば、ノルウェー語では話者向け行為の有無は *komme* の使用を予測しないが、英語では付随行為がある時に *come* がより多く用いられる (Matsumoto, Akita & Takahashi 2017)
 - * 移動表現の類型論において同じ付随要素枠づけ言語としてひとまとめにされてきたゲルマン語内でも直示動詞が用いられる条件に違いがみられる
 - * それぞれの言語話者がどのような条件下で直示動詞を用いるかを調査することは、直示動詞の研究および言語間の表現のバリエーションを考える移動表現の類型論にとって重要である
- 第三に、直示に注目することはそれぞれの言語の移動表現の全体像を理解し言語を類型論的に位置づける上で重要である
 - * ノルウェー語はこれまで典型的な付随要素枠づけ言語とされてきた
 - * しかし、今回の実験で、ノルウェー語話者が特定の条件下では様態を主動詞で表し直示を前置詞句などで表す (2) のような付随要素枠づけ言語らしいパターンではなく、直示を主動詞で表す (3) のような付随要素言語らしくないパターンを選ぶことが多いということが明らかになった
 - * このように、直示に注目することで、類型論的な位置づけを見直す必要性がでてくる可能性がある

5 おわりに

- 本発表では、*komme* 「来る」の使用条件について以下の主張をした
 - *komme* の使用には TOWARD THE SPEAKER という移動の方向だけでなく開放性や可視性などの空間の特性も関わっている
 - 同様の特性は話者の方向への移動を表す前置詞句 (*mot meg* ‘toward me’ 等) には見られない
- このように本研究は、直示表現の通言語的・ゲルマン語内・ノルウェー語個別言語内のバリエーションを指摘することで移動の類型論およびノルウェー語の個別言語の研究に貢献する

参考文献

- Dimitrova-Vulchanova, Mila & Liliana Martinez. 2013. A basic level for the encoding of biological motion. In Carita Paradis, Jean Hudson & Ulf Magnusson (eds.), *The Construal of spatial meaning: Windows into conceptual space*, 144 – 168. Oxford: Oxford University Press.
- Egan, Thomas & Anne-Line Graedler. 2015. Motion *into* and *out of* in English, French and Norwegian. *Nordic Journal of English Studies* 14(1). 9 – 33.
- Fillmore, Charles J. 1975. *Santa Cruz lectures on deixis, 1971*. Bloomington, IN: Indiana University Linguistics Club.
- Holum, Line-Marie. 2010. Å uttrykke bevegelse på et andrespråk [To express motion in another language]. *NOA Norsk som Andrespråk* 26. 5 – 35.
- Johansen, Stine Camila. 2011. *Går på tur aldri sur: En korpusbasert studie av bevegelseshandlinger og morsmålstransfer i innlærtekster fra voksne informanter i norsk som andrespråk [On a hike - never gripe!: A corpus-based study of motion events and native tongue transfer in learning texts from adult informants in Norwegian as a second language]*. Oslo: The University of Oslo MA Thesis.
- 松本曜. 2017. 移動表現の類型論. 東京: くろしお出版.
- Matsumoto, Yo, Kimi Akita & Kiyoko Takahashi. 2017. The functional nature of deictic verbs and the coding patterns of Deixis: An experimental study in English, Japanese, and Thai. In Iraide Ibarretxe-Antuñano (ed.), *Motion and space across languages: Theory and applications*, 95 – 122. Amsterdam: John Benjamins.

- Matsumoto, Yo & Xia Haiyan. 2017. Visibility, attention, and purpose in the use of deictic verbs: Findings from English, Japanese, and Chinese. Paper presented at The 14th International Cognitive Linguistics Conference University of Tartu, Tartu, Estonia 10-14 July, 2017.
- Talmy, Leonard. 1991. Path to realization: A typology of event conflation. *Proceedings of the 17th Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*, 480 – 519.
- Talmy, Leonard. 2000. *Toward a cognitive semantics, Volume 2: Typology and process in concept structuring*. Cambridge, MA: MIT Press.

表1 *komme* の使用における [A] 話者領域 1 の要因の効果の混合ロジスティック回帰

| 要因 | 要因のレベル | 推定値 | 標準誤差 | Z 値 | p 値 | 有意性 |
|-------|-------------------------------|---------|--------|--------|----------|-----|
| (切片) | | -6.5951 | 1.2733 | -5.180 | 2.22e-07 | *** |
| 直示 | AWAY FROM THE SPEAKER (基準レベル) | | | | | |
| | NEUTRAL | 3.4765 | 1.0890 | 3.192 | 0.001411 | ** |
| | TOWARD THE SPEAKER | 7.2253 | 1.2437 | 5.810 | 6.27e-09 | *** |
| 空間の開放 | 開いたスペース (基準レベル) | | | | | |
| | 閉じられたスペース | 2.0922 | 0.5539 | 3.777 | 0.000159 | *** |

表2 *komme* の使用における [B] 話者領域 2 の要因の効果の混合ロジスティック回帰

| 要因 | 要因のレベル | 推定値 | 標準誤差 | Z 値 | p 値 | 有意性 |
|------|-------------------------------|---------|--------|--------|----------|-----|
| (切片) | | -3.8285 | 0.7437 | -5.148 | 2.64e-07 | *** |
| 直示 | AWAY FROM THE SPEAKER (基準レベル) | | | | | |
| | NEUTRAL | 0.1558 | 0.5586 | 0.279 | 0.78037 | |
| | TOWARD THE SPEAKER | 1.7372 | 0.5310 | 3.272 | 0.00107 | ** |
| 階 | 話者がいない階 (基準レベル) | | | | | |
| | 話者がいる階 | 1.8537 | 0.4724 | 3.924 | 8.71e-05 | *** |
| 声かけ | 何もしない (基準レベル) | | | | | |
| | hey と言う | 0.1688 | 0.4114 | 0.410 | 0.68151 | |

表3 *komme* の使用における [C] 可視性の要因の効果の混合ロジスティック回帰

| 要因 | 要因のレベル | 推定値 | 標準誤差 | Z 値 | p 値 | 有意性 |
|------|-------------------------------|------------|-----------|--------|----------|-----|
| (切片) | | -6.524e+00 | 1.830e+00 | -3.565 | 0.000363 | *** |
| 直示 | AWAY FROM THE SPEAKER (基準レベル) | | | | | |
| | NEUTRAL | -6.058e-06 | 9.508e-01 | 0.000 | 0.999995 | |
| | TOWARD THE SPEAKER | 2.041e+00 | 9.636e-01 | 2.118 | 0.034182 | * |
| 可視性 | 可視から不可視 (基準レベル) | | | | | |
| | 不可視から可視 | 4.348e+00 | 1.355e+00 | 3.209 | 0.001333 | ** |

表4 *komme* の使用における [D] 話者向け行為の要因の効果の混合ロジスティック回帰

| 要因 | 要因のレベル | 推定値 | 標準誤差 | Z 値 | p 値 | 有意性 |
|--------|-------------------------------|------------|-----------|--------|----------|-----|
| (切片) | | -5.596e+00 | 1.323e+00 | -4.228 | 2.36e-05 | *** |
| 直示 | AWAY FROM THE SPEAKER (基準レベル) | | | | | |
| | NEUTRAL | 1.595e+00 | 1.192e+00 | 1.338 | 0.181 | |
| | TOWARD THE SPEAKER | 6.349e+00 | 1.273e+00 | 4.985 | 6.18e-07 | *** |
| 話者向け行為 | 行為なし (基準レベル) | | | | | |
| | バッグを持つ | 8.987e-06 | 7.066e-01 | 0.000 | 1.000 | |
| | バッグを受け取る | 4.933e-01 | 7.065e-01 | 0.698 | 0.485 | |
| | 微笑む | 2.481e-01 | 7.054e-01 | 0.352 | 0.725 | |